出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

＜サロン・あべの＞NO．４１　　平成　元年１１月２５日（土）発行

＜サロン・あべの＞十月の出会い

大阪の自然史を　たずねて

金木犀の香りがただよい晴天に恵まれた平成元年十月二一日（土）午前十一時～午後三時三〇分、大阪市立自然史博物館（東住吉区長居公園南東角にある市立長居植物園内）を見学し、十月の集いを持った。

自然史博物館の玄関ホールに入ると、大きなナウマンゾウが鼻を高々と上げて、私達を出迎えてくれた。このオリエンテーションホールで館の展示案内のパンフレットを受け取り、各々が順路に従って自由に展示室を巡った。

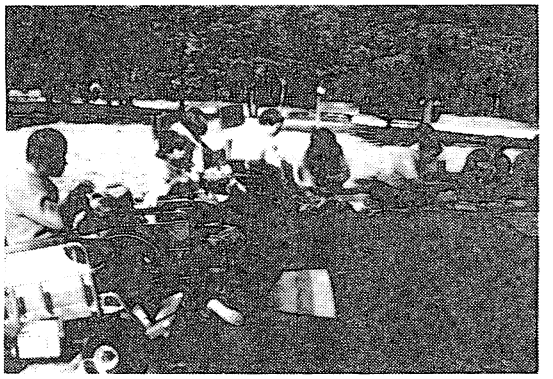
当博物館は、昭和四九年四月にこの地に開館され、六一年四月に展示室が一新されている。人と自然とのかかわりを大阪という身近な場所と自然をもとにして四つの展示室で各テーマを持って、私達に「自然と人間」の関係をわかりやすく見せていた。

○第一展示室

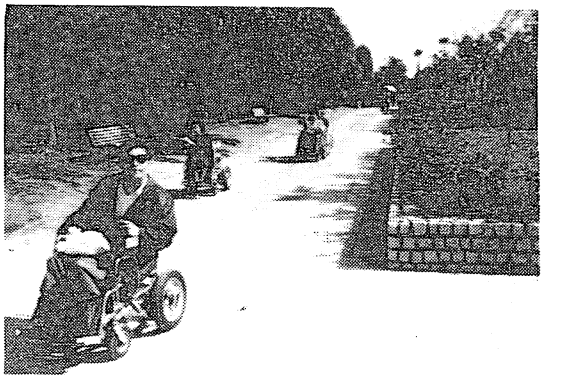
「大阪の自然」と題して、この一〇〇年ほどの間に変化していった自然環境が再現されている。外国からの帰化植物（西洋タンポポ等）や魚介類（ブラックバス・ムラサキ貝）の対比展示に始まり、今ではよほどの郊外へ行かないと見られないであろうと思われる里山や村の自然が、動植物の姿を通して語られている。ドングリ・シイの実、ネズミ・イタチ・イノシシ・シカ、キジ・スズメ・カラス等々、なじみの動植物達の姿が見られる。

○第二展示室

ここでは、「大阪平野のおいたち」から順に時代をさかのぼり、日本列島のなりたちや地球の歴史がそこに現われた生物の移

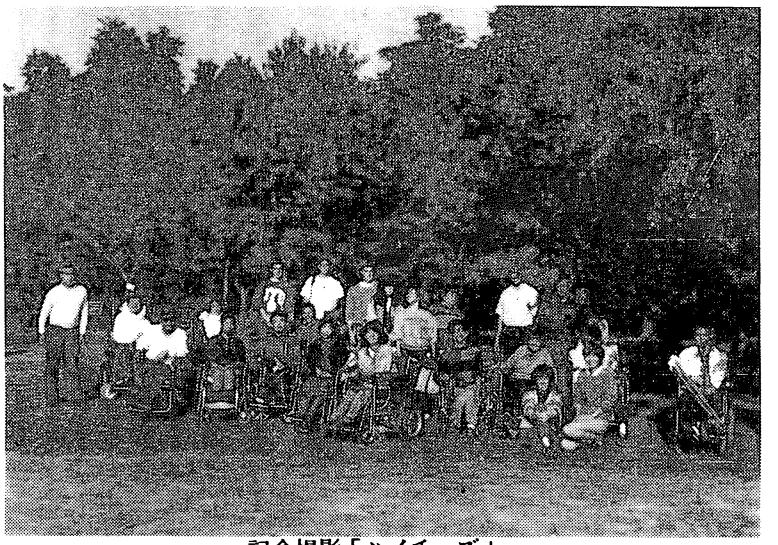


青空の下　楽しい昼食



電動車椅子　堂々の縦連行進

り変わりを通してみられる。
シダ類やアンモナイトの化石等が昔の姿そのままに凹版画のよう。人類の時代を迎えるまでの生物の盛衰がはっきりと記憶されている自然の確かさを感じた。また、手でさわれるコーナーも有り、アンモナイトや石炭の感触を楽しめた。


記念撮影「ハイチーズ」

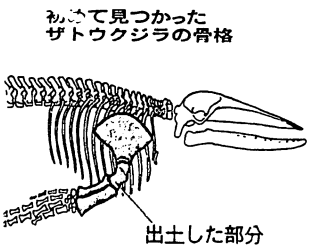
第二展示室から、二階へ階段が通じているが、車椅子使用者には館のエレベーターを利用させてもらえた。大きな箱で電動車椅子三台が一度に乗ってもまだゆとりがあった。何回かに分けて十三台の車椅子が職員のお世話になり、二階の展示室へと移動して行った。

○第三展示室
地球が誕生して約四六億年、そして生命が現われてから約三五億年になり、その間に様々な生命が生れ進化して、現在の地球には二〇〇万種とも三〇〇万種ともいわれる生物が生活している。その中で私達人間も自然界の一員として進化してきた。それは、種の誕生から始まり生命どうしのつながりへと拡がっていく過程の中から、二本足で歩きだした人類にとっては全てに関係している。骨格標本の姿を見れば、それが一目で解り、一時「一皮めくれば皆同じ」と感じ、生命の重さ尊さを見た。

○第四展示室
「自然のめぐみ」の代表として森林は、今日まで人間の食べ物や生活文化に深く関わってきた。科学の発達した現在でも人間は、自然のめぐみを受けその関係にたよっている。穀類、野菜、果物類、いも類等々豊かな自然の中にこそ私達の生活と文化の繁栄が成り立つ。道端の草一本でさえ地球の仲間であり、人間にとっては自然のめぐみといえる。生きている私達が大切に守り育ててゆきたいものである。

大阪と真ん中にクジラの化石

○特別展示室
ジャンプするクジラとして知られているザトウクジラの胸ヒレ部分の化石（右肩甲骨、右上腕骨、右とう骨）が、この三月大阪市中央区の工事現場から出土し、十月二一日から三一日まで特別展示されていた。第二展示室で、大阪平野の生いたちをみた



時、六〇〇〇年前には今の大坂城を先端にして阿倍野区周辺を根にして上町台地がはっきりと姿をみせていた。海は生駒山のふもとまで広がっており、河内湾とよばれ大きなクジラも入りこんで、豪快な潮吹きの姿がみられた…とは、なんとも楽しい。

地形と生物との関係が自然という大舞台で見せてくれたはるかなロマン。たった三片の化石とはいえ、合わせた長さは二・九m（ザトウクジラの平均的体長は、十五m前後、体重六五tで胸びれが長い）には、六〇〇〇年前の潮騒が感じられた。

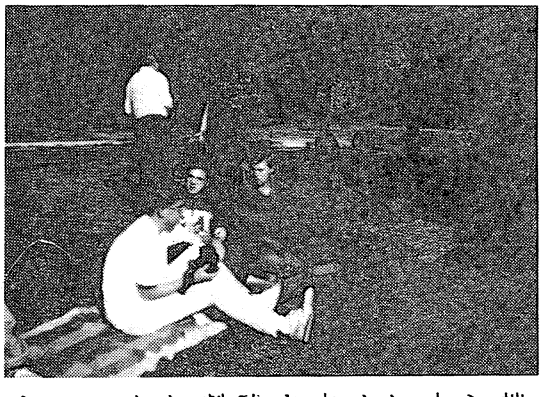
他に大阪のクジラとしてミンククジラ・マッコウクジラの化石が展示されている。

一時間余りの見学会をした後、まぶしく澄みきった青空の下に出た。公園の木々はまだ緑が濃い。バラ園の深紅のバラは香ぐわしい。池のアヒルが水面を滑り、噴水のしぶきが虹を作る。芝生広場にはお弁当を広げる人達があちこちに見られる。タイムカプセルを抜け出してきたような自由な空気を胸いっぱいに吸いこんで、私達は陽気にしゃべりあいながら木陰を選び、車座になった。〈サロン・あべの〉で用意したささやかなお弁当が手渡され、一時静けさが流れる。木もれ陽がゆれ、鳥の声が遠くで聞こえる。何千年もの昔から続いている営み、その一瞬に参加している私達。黙っているだけでも満ちたりた想いがするが、お腹がくちくなると元気に言葉が飛び交い、自己紹介へと移っていった。

今回は、初参加者が多かったが、特にボランティアとして参加して下さったアメリカの四人の青年方には、あれこれ質問が出された。時ならぬ国際交流の場となり流暢な日本語の答に安心して想うままに語りあえ、時間の経つのも忘れ予定時間を超えて三時半に解散した。

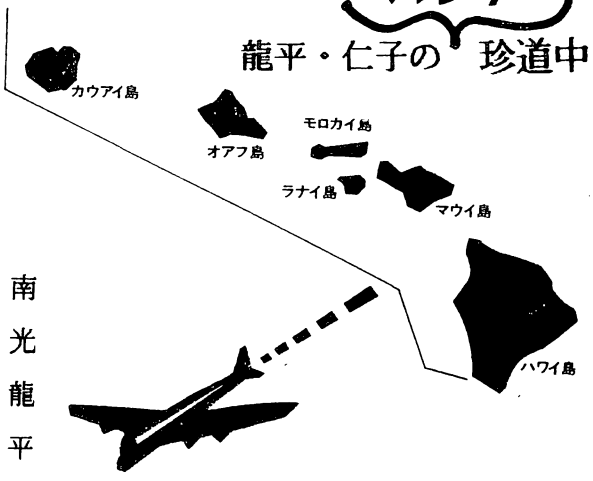
司会は、河合恵子さん。参加者二八名。

こんな出会いもありました



小春日和の昼下がり、広々とした公園での語らいはそれだけで楽しいものですが、それにボランティアとして参加された四人のアメリカのひととの出会いが加わり、異なった社会生活の一端をうかがうことができた今回のサロン。このひとたちはいずれも十九ー二十一歳の大学生で休学して日本に来ているそうですが、滞日一年十ヶ月のチャベルさんはとても日本語が巧み。日本にきて一年が過ぎたというアステンさんはフットボール・バスケット・野球が好きなスポーツ青年。ジャズと演劇ファンのリングウォールさんは来日して二・五ヶ月。バスケットと水上スキーが好きなダーフィーさんはまだやってきて三週間。アイダホから来たアステンさん以外の三人は、ユタ州出身。全出席者の自己紹介のあと、彼らに様々な質問をしたり、音楽や映画など話の輪が広がりました。そのなかで印象的だったのはハンディをもった人も普通の学生と変わらず、大学で学んでいるということでした。（河合恵子）

ハワイ 龍平・仁子の珍道中 ①



南光龍平

このたび、南光龍平氏に「龍平・仁子のハワイ珍道中」を連載していただくことになりました。南光氏は車椅子で、昨年、一昨年とハワイや韓国へと積極的に出かけられており、物見遊山も地についた楽しいお話が伺えることと思います。

禍福はあざなえる縄の如し

物のはずみとは恐ろしい。

友達の家で、一杯やりながら話しに花を咲かせていたら、いつのまにやらハワイへ行ってしまっていた・・・。というのは少しオーバーだけれど今回のハワイ旅行は、友達との話の中で出た「東京ディズニーランドへ行くのに二〇万円もかかるんや！」という言葉につられて我が女房の発した「それだけあればハワイへいけるやん」の一言で決った。

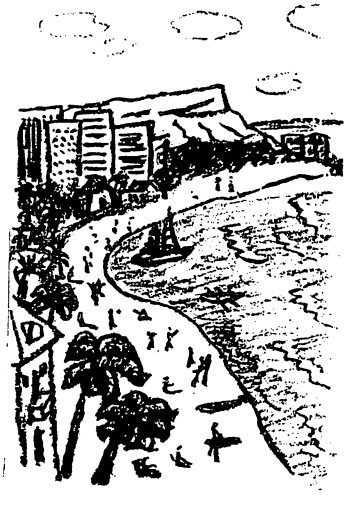
一杯入っていた勢いも手伝い、話はどんどん膨らんでいき、二組の夫婦の間の夢物語の中へ途中からもう一組の夫婦も巻き込み、いよいよ具体的な話へと進んでいく。

じつは私達夫婦は昨年の一月にも十人余りのツアーでハワイ旅行を経験している。その経験から「二〇万円もかかるんならハワイへ・・・」という言葉が出たのだが、そんな経緯があるおかげで、今回の旅行の幹事というか連絡役は私になってしまった。

さっそく翌日、前回のツアーでお世話になった旅行社に電話。

電話の相手は、障害者の海外旅行を何回も手掛けているNさん。「またハワイへ旅行を考えているんですがお願いできますか？」という私の言葉に、最初はいつもの明るい声で応対してくれていたが、参加メンバーの内容を話すうちに徐々に声のトーンが落ちていくのが分かる。

無理もない。参加するのは夫婦三組、うち二組は車椅子。さらにそのうち二台は電動車椅子。残る一組はご両人とも松葉づえ。



おまけに介護者はゼロ。〈普通〉の感覚から考えれば、はなはだ無謀且つ大胆な冒険ツアーだ。

それでも、Nさんの努力の賜物で我々の言いたい放題のスケジュールが固まっていった。

五泊七日の日程、観光用の潜水艦での水中散歩、スキューバダイビング、サンセットクルーズ、フリーマーケットやショッピングセンターでの買い物、等々。精一杯みんなの希望を盛り込んだ楽しい旅の予感がしてくる。ただひとつ最後まで決らなかったのが、こともあろうに出発の飛行機の時刻。夏休みの観光シーズンからは少しはずれている時期で多少は空いているだろうということで、わざわざ九月のはじめの頃を狙って予定を立てたつもりだったのが、この時期になっても飛行機は満席、積み残しまででる便があったとのこと。改めて海外旅行ブームの凄さを思い知らされた。もっとも我々のような者でも出掛けて行こうという時代なのだから無理もないなぁ、と納得したり感心したり・・・。それはともかく、本当にヒヤヒヤしながら出発の時刻の決るのを待つ日が続いた。

結局は、成田経由のノースウエストの便で行くことが決まり、参加者一同ホッと胸をなでおろす。

ところが、いざ出発の日になってまたまたハプニング。

普段の行ないの悪い者の集団のためか、はたまた雨男と雨女の集りだったのか、出発当日は文字どおりバケツをひっくりかえしたような、というよりジャンボジェットも飛べないような大雨。なんと大阪空港で四時間も足止めを喰うはめになってしまった。

しかし、禍福はあざなえる縄の如し！？

本来なら一般の搭乗口からではなく、荷物用リフトに乗せられて別の搭乗口から乗り込むことになっていたのが、大雨と時間の遅れとが重なってそんな遠回りなことをしている場合ではないという機長の判断で、結局一般の搭乗口から乗り込めるようになった。おまけに、我々の席が入口から遠いということもあって、空いていたファーストクラスに乗れることになった。もちろん成田までの一時間余りのことだったが、ファーストクラスなんて多分（いや絶対に）最初で最後の経験。「定刻通り」にはいかなかったが、そのぶんリッチな気分を満喫してこの旅はスタートした。（つづく）

おしらせ

十二月のサロン

日時　十二月九日（日）
　　午後一時～四時

場所　育徳コミュニティーセンター
　　二階研修室（スロープ、車いすトイレあり）

内容　「クリスマスinサロン」

会費　一二〇〇円（すてきなプレゼントを用意しています）

申込み先　十二月五日までに
　　冨田慶子TEL・06-691-1028へ

＃感謝します＃

カンパ・切手・ご協力ありがとうございました。

お礼を申し上げます。

十月のカンパ合計四〇〇〇円

柿岡　緑、関本邦雄、匿名様二名

（敬称略）

祈りをうけて

小学校の五年生の夏だったと思うのだが、林間学校というものがあり、ぼくは、大きなお寺が頂上にある山で一晩すごしたことがある。

そのとき、住職のひとりが、生徒たちの前でお寺の説明をした。「この山の中のお寺で、たくさんのお坊さんたちが、みなさんの幸せのために祈っているんです」と、その人は言った。

その一言が、林間学校の思い出として、妙にあざやかに残っている。

こんな山の中で、祈って何になるのだろう。それにこちら側が頼んでもいないのに、どういうことだろう。祈ってくれていることさえ、いままで知らなかったし、それにぼく自身は仏様なんて信じていないのに、それでも意味があるのだろうか。

まあ、祈ってくれていても、ぼくに面倒なことがおこるわけではないから、祈ってくれるのは構わないのだけれど、それにしてもわけのわからない話だなあというのが、当時のぼくの印象だった。

あれから二十年ほどたった最近、ぼくが以前通っていた教会の牧師から、一通の葉書が届いた。「あなたのことを、礼拝の時間に祈りました」という内容だった。礼拝の司会の人が、ぼくのことを祈ってくれたらしいのである。

実は、つい先日まで、複雑な国情をかかえた外国人の女性と結婚することによって、たいへん面倒な問題にまきこまれていた。教会の人たちは、それをとても心配してくれていたのである。

林間学校の夏の日から二十年たって、ぼくは再び、自分の知らないところで自分の知らないときに「祈り」を受けていることを知らされたのである。

気づくことなく「祈り」を受けていたとき、ぼくは何をし、何を思っていたのだろう。毎日と変わらぬままに新聞を読み、あるいはテレビを見、地下鉄の座席にすわって、うつらうつらと眠っていたのかもしれない。

「祈り」とは何と不思議な行為だろう。ぼくたちは「祈り」によって、神や運命を動かすことはできないと知っているはずである。それを知っていて「祈る」とは、どういうことなのだろう。

祈るとき、ぼくたちは手を合わせるのだが、それは手を広げて身構える姿勢とは全く逆の、無防備な危うい形である。そのような、外敵に対して無力な構えを通じて、ぼくたちは祈る。

ぼくのことを言えば、いまのぼくのひとつの祈りは、重い病と闘っている友人の回復である。その人が生命を保つためにぼくができることは何もない。しかし、何もできないからと言って、その人の病のことを忘れることもできない。その人に会ったとき、ぼくが戸惑うでもなく恐れるのでもなく、真正面からその人を受けとめることができるために、ぼくができることは、毎日の「祈り」しかないような気がするのである。

「聞かれざる祈り」があると、ぼくに葉書を書いてくれた牧師は、よく言っていた。しかし、「祈り」は虚しいものではなく、わずかだが重みがあり、「積み重ねる」ことができるのだという気がする。

「祈り」はたとえ聞かれなくても、祈られた願いは、わずかな重みとともに、ぼくたちの周囲に残るのではないか。その重みは積み重なり、何かを確実に変えていく。微風にも揺れる小雪の降り積もりが、ついには大地を堅め清めるように、ぼくたちの小さな祈りも祈る者自身を変え、やがては祈りを受けたものをも変えていくのだと信じたい。

（知）

《第六回　大阪市リハビリテーション市民講座》

平成元年十月二十八日（土）・二十九日（日）の両日、大阪市身体障害者スポーツセンターにおいて、大阪市リハビリテーション市民講座が開催されました。六回目になります今年のテーマは、『レクリエーション』でした。

少し冷たい風が吹いていたものの、まずまずのお天気に恵まれた二十八日（日）に見学して来ました。「旅」・「スポーツ」・「ゲーム」の三つのコーナーに分かれた展示のほかに、アーチェリー場では、ミニ動物園が開かれ、子供達も楽しんでいました。

その中で私が一番興味を持ったのは、「旅」についての展示でした。主に車椅子の人を対象とした、全国各地のガイドブック（観光情報を含んだもの）が集められ、旅行に役立つ情報がたくさんありました。

リハビリテーションといえば、歩行訓練であったり、職業訓練であったり、とかく、自立するための手段と思いがちです。また、つらく、きびしく、暗いというようなイメージがありました。ところがこの市民講座では、ゲームやスポーツや旅行など、レクリエーションを通じて、生きていてよかったと感じ、生きる意欲を創りだそうと提案しています。つまり、レクリエーションは精神面からリハビリテーションを支えていくものではないでしょうか。

健常者とおなじように、障害者にも豊かな生活を営む権利があるのです。人間らしく生きること、人生を楽しむことの権利も、保障されなければならないのです。障害者にとってのレクリエーションが、これから、ますます注目されていくことを願います。

（U）

旭　純子

ろうあ者福祉行政・施策上の問題点

二、社会参加促進事業・その他の問題

この事業の主要部分をなす「手話通訳関係事業」の問題点についてはこれまでにふれてきたが、そのほか難聴者、中途失聴者を主たる対象とする「要約筆記事業」では、登録奉仕員の数が不足している。このような奉仕員養成・派遣事業は、実際の登録者数だけでその事業の充実度を判断することはできない。奉仕員事業である限り、事実上の活動可能者数はその一部に過ぎないからである。しかし行政側は委託団体からの数値報告のみにより事業把握を行いがちであるため、行政とろうあ団体の見方は矛盾する点が見受けられるのである。講習会を何回行ったとか、登録者数が何人などという数値上の実績判断でなく、もっと深い内容的把握、ろうあ者のニーズの把握を重視した事業の実施が要求される。

そのほか補聴器や日常生活用具の開発は、日常生活の不便を補足する上で必要であるが、補聴器の給付には所得制限、日常生活用具の給付には限度額があって、ろうあ者が十分に利用できる制度となっていない。また、屋内信号灯を受給している家庭で、たまたま来訪者があった時に他の部屋や台所にいたり、入浴中で気づかず、あとで非難されたり、ひどい時には人間関係を絶つ羽目になったという友人は、各部屋に屋内信号灯設置を認めて欲しいと話していた。

一方、ろうあ者更生援護施設の不足は、施設収容の必要なろうあ者への措置を著しく欠く原因となっている。現行制度では既存施設の拡大利用にとどまっており、ろうあ者が専門的に更生指導、訓練を受けられる施設の都道府県単位の設立が望まれる。さらに言えば、各所の老人ホームに点在すると思われるろうあ老人のための「ろうあ老人ホーム」や、二十四時間生活施設を含めたコロニー的総合施設も今後必要とされるのではないだろうか。

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。サロン紙四〇号は、梶原慶子さんに朗読していただきました。バックナンバーは三八号、三九号があります。

サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。（TEL06-691-1028）

まちづくりのはなし（10）

第九話

やっぱりやってみるもんだ

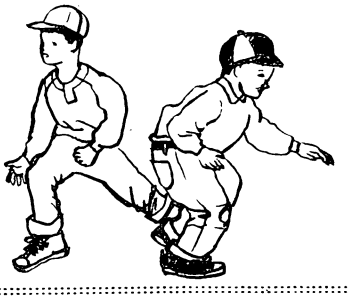
原田　仁

とっても機嫌がいいんです。そりゃぁ日本シリーズは残念だったけど、あの激戦のパ・リーグを制したんですから。

ぼくが近鉄ファンになったのは、大好きだったアーモンドグリコキャラメルのCMに太田幸司が出てたということだけ。でもその頃からもう二十年位になるんですね。

大阪に来てからはときどき観に行くんですが、僕が藤井寺に行くと絶対負けない。じゃぁ全試合行ったら全部勝つ、わけ絶対ないから、ここぞという時に行くんです。

で、今年はあの十月十四日、これに勝ったら優勝という日に行った。その日はもう始まる前から異様な盛り上がりようで、ゲームも最高。スタンドものりにのって、そして優勝！　いやぁ感激しました。思いっきりバンザイして喜んで。



ところが：なんです。ものすごく嬉しいんだけど、胴上げして、走り回っている選手の人たちを見てると、なんか違うような、取り残されたような気持ちがする。でも、当り前ですよね、毎日一生懸命に頑張ってきた彼らと、ビール飲んでテレビを観ていた僕が同じなんてわけないんです。

ひょっとしたら、まちづくりも同じかなって思います。何でもいい、見てるより頑張ってやってみる。それで何かがちょっとでもできれば、きっとこんなに嬉しいことはないって思えるんです。

冨田慶子さん　新聞に！

障害者と健常者　ヨコのつながり求め

「サロン・あべの」は、1985年、大阪・阿倍野区の育徳コミュニティセンター内に開設された障害者と健常者の出会いの場。

「最近、障害者同士の横のつながりも生まれてきましたし、サロンに参加した人に、町で声をかけてもらったりすることも増えてきました」と、代表の冨田慶子さん（48）＝写真。介助される側と、する側という枠を超えて、障害者と健常者が横の関係を結びたいと毎月、いま話題になっている社会問題などを取り上げ、勉強会を開いている。

次回は、11月25日午前11時から、大阪市身体障害者スポーツセンターで、阿倍野区ボランティアスクールの受講生との「ふれあい交流会」に参加する。

平成元年10月31日付読売新聞（夕刊）

なんとかしてくれ

中西利香

大は小を兼ねないボタンホール

私は、カッターシャツブラウスにジーンズのズボンというファッションが大好きです。動き易いし、色々な組み合わせが自由に出来るからです。ところがこのスタイルになるにはちょっと不便を感じています。

カッターシャツブラウスの釦が小さくて私の指では摑みにくいのです。それにボタンホールも小さく、止められません。

そこで母にボタンホールの穴を大きくしてもらったことがあるのですが、止め易くなった分だけ釦が腕の動きや体の動きにつれて動き、知らない間に釦がはずれてたりしたのでそれも止めました。

自分一人で着られるカッターシャツブラウスがあれば、もっとオシャレが出来るのになぁ・・・。

編集後記

初めて本紙の朗読テープを聞かれた方から「相当な訓練を積まれたものと拝察いたします。とくに記事の内容によって声音を変えての読みの配慮は、聞くものを捉えてはなさない・・・」と。

手紙で「３９号、４０号の『お湯まわり』はショックでした。一日の疲れがどっと出るとは・・・」

１０月の出会いに参加された方からは、「たまに外で皆いっしょに食べるのも楽しいね」との声も。　（石）

＜サロン・あべの＞第４１号
発行日　平成　元年１１月２５日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印　刷　セルフ社　電話（06)691-2365
［阿倍野区西田辺２－２－１０
グレース鶴ヶ丘１０１号］
定価　￥６２．

いわさきちひろのカレンダー

昭和町１－２－５（地下鉄文の里駅北出口すぐ）にあります、どろんこ共同保育所では、いわさきちひろのカレンダーを販売しています。１部1,250円です。そのほかにも、うどん、お茶、乾燥わかめ、チョコレート、電化製品の取り次ぎ販売などもしています。

どろんこ共同保育所は、主に０歳児で一般の保育所に入る前の乳児を預かっています。しかし、大阪市からの補助金がなく、保育料だけではとても運営していくことができません。保母や、親たちやＯＢが、カンパやバザーをしながら、なんとか運営している保育所なのです。

くわしくは、☎６２１－４３６５ウエヒラまで。よろしくお願いします。